

# 安心して学ぶことができる環境づくりを目指す学科行事のあり方 －短期大学における学科行事の実践とその評価をとおして－

宮崎 大樹, 浜田 幸作, 池澤 眞由美, 竹村 正, 吉村 齊, 寺尾 康,  
田村 由香, 山本 英作, Paula D.Fabian, 大松 伸洋, 岡村 奈緒美

## 報 告

# 安心して学ぶことができる環境づくりを目指す学科行事のあり方 —短期大学における学科行事の実践とその評価をとおして—

宮崎 大樹<sup>1\*</sup>, 浜田 幸作<sup>1</sup>, 池澤 眞由美<sup>1</sup>, 竹村 正<sup>1</sup>, 吉村 齊<sup>1</sup>, 寺尾 康<sup>1</sup>,  
田村 由香<sup>1</sup>, 山本 英作<sup>1</sup>, Paula D.Fabian<sup>1</sup>, 大松 伸洋<sup>1</sup>, 岡村 奈緒美<sup>1</sup>

**要約：**本研究は、短期大学における学科交流行事の実践の効果を、アンケート調査の結果をもとに明らかにしたものである。調査対象は短期大学教員養成系学科に所属する学生であり、1年生76名、2年生78名である。学生が入学時から安心して学習に取り組むことができる環境構築を目指し、学生同士の交流を促し、仲間づくりを進めることを目的として学科行事を実施した。年間を通して計画した学科行事は、新入生歓迎会・運動会・レクリエーション活動・交流ランチ・遠足・卒業生壮行会・謝恩会であり、本研究においては、このうち令和元年度8月末までに実施した新入生歓迎会・運動会・レクリエーション活動・交流ランチの4つの行事についてアンケート結果を示し、分析を加えた。その上で、学科行事をとおした学科運営のあるべき方向性を示すことを目的とした。

**キーワード：**行事, 学習環境, 保育士・幼稚園教諭養成, 短期大学

## 1 はじめに

### 1. 1 大学への不適応を起こす学生の現状

学校教育現場における「小1プロブレム」や「中1ギャップ」などの接続期における諸問題が表面化されて、すでに久しい。これは、就学前教育・小学校・中学校の現場だけの問題ではなく、高校から大学への接続についても同様といえる。近年、18歳人口の減少に伴う大学全入時代の到来により、伊藤(1999)の述べるように「大衆化した大学において大学生は、専ら授業を受ける存在として「生徒化」し、中学生、高校生と質的に大きく変わらない存在となっている」。問題の根源は、高校以前の取り組みだけでなく社会的な部分にあると考えられるが、大切なのは、今日の大学において学生の「生徒化」は避けることのできな

い状況にあるということだ。そういった全国的な現象を否定するよりも、むしろ今日の大学に求められているのは、現実的な対処であるといえる。文部科学省(2016)は、「高大接続システム会議」ほか、積極的な議論を進め、マクロ的な視点に立った高大接続改革を進めている。以上のことから、各大学教育の現場においても、接続期における諸問題の解決と予防に取り組む意義は大きいといえる。

では、具体的に大学に入学した学生は、どのようなことに戸惑い、困っているのであろうか。文部科学省(2014)によると、平成24年度の大学・短期大学・専門学校の中途退学者は79,311人であった。その中でも「学業不振」が理由の中途退学は第3位、全体の14.5%(11,503人)であり、「学

<sup>1</sup> 高知学園短期大学 幼児保育学科 \*Email: dmiyazaki@kochi-gc.ac.jp

校生活不適応」は全体の4.4% (3,461人) である。この結果から、年間14,000人以上の学生が「経済的理由」「転学」「就職」などの理由ではなく、いわば大学への不適応を理由に中途退学しているということがわかる。

このような現状の中で、高校から大学への接続において、大学としてどのような働きかけができるか。ひとつは初年次教育の充実である。和足ら(2019)は、初年次教育の内容の充実と中退率の関連を分析し、初年次教育には中退防止効果があることを示唆している。また、大学生の自己評価にもっとも影響を及ぼすのは「学業」であるという溝上(2018)が述べるように、学業は学生にとって最も重要なもののひとつといえる。しかし、大学に入学した学生に対して、何の手立ても打たないようであれば、学生の「生徒化」が進む近年の大学においては、学生自ら学業に取り組むことは難しい。学生が精力的に学業に取り組むことができるようになるためには、「学びやすい環境」があることが大切であり、学びやすい環境の中で、仲間づくりを促進し、自尊感情を高めることが重要であると思われる。

では、学びやすい環境とはなにか。村上ら(2014)は「入学当初の学生にとって、大学生活での希望や願いをもって意欲的に活動するためには、その基盤となる仲間、学内で応援してくれるサポーターを得ることが必要である」としており、基盤となる「仲間」や「サポーター」の存在について指摘している。また、石川ら(2018)は、クラスを良い雰囲気へ導いていくことは、大学になじめない・大学生活にやりがいを感じにくい学生を支え、学習を前に推し進める支援として有効であり、良い雰囲気が学ぶ楽しさを感じていない学生層の慣れとライティングスキルを底上げする可能性がある」と述べている。つまり、大学生活を送る上で、学生の学びを支える基盤としての安定した人間関係があってこそ、学習はその成果をあげることができるといえる。だとすれば、大学は学生が精力的に学業に取り組むことができるようにするために、仲間やサポーターづくりを含めた、

「学びやすい環境づくり」を進めていく必要があるということである。とりわけ、学習を継続的に推進するためには、学習過程における学生自身の成長を内省することが求められる。Bandura(1977)によると、自分自身への期待を抱くことが行動の選択に影響を及ぼす。それゆえ、期待につながる肯定的感情は、学びを促進するために必要な要因であることが示唆される。この種の感情は自尊感情(Rosenberg, 1965)として長い間注目されてきた。さらに、中間(2013)によると、自己への期待とは自己のみならず、自己を取り巻く他者や環境に対する肯定的感情が重要であることが指摘されている。したがって、理論的背景からも、学生が主体的に学習を推進するためには、学生の自尊感情を育むこと、その前提として所属集団の仲間と受容し合える環境づくりが求められることとなる。その環境づくりの一環として、サポーターづくりが重要になると予想される。

こういった、いわゆるマクロではなくミクロ的な高大接続において重要なことは、学生一人一人の状況に応じた取り組みをすることである。村上ら(2014)の述べるように、「大学生はすでに大人であるという認識から、校種間の違いがあるのは当たり前であり、発達段階において各自で解決すべき問題として捉えられやすく、大学生活上の諸問題への対応は学生個人の責任に帰せられやすい」。そのため、高大接続は制度の改革などのマクロ的取り組みが中心である。しかし、「生徒化」した学生たちには、それぞれが抱える不安や戸惑いに対応するような取り組みを大学として提供することも必要だと考える。

視点を変えて、幼小接続に目を向けてみると、「小1プロブレム」が大きな問題として捉えられている。平成29年3月に改定された「幼稚園教育要領(2014)」「保育所保育指針(2014)」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領(2014)」及び「小学校学習指導要領(2016)」において、これまで以上に就学前教育と小学校の連携強化や連続性と一貫性をもった「円滑な接続」の重要性が示されている。その上で、受け入れ側の小学校に求め

られているのが「スタートカリキュラム」の作成である。文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター（2015）によると、「スタートカリキュラム」とは、小学校へ入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムのことである。これを大学教育に置き換えて考えると、初年次教育におけるカリキュラム編成といえる。さらに、同センター発行の「スタートカリキュラムスタートブック」（文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター，2015）には、「分かりやすく学びやすい環境づくりをしたりすることで、子供は安心して小学校での生活をスタートすることができます。また、先生や友達と関わる活動を通して、出会いの喜びや学校の楽しさを感じることができます。こうした安心や楽しさは小学校での生活の支えとなり、いわゆる小1プロブレムなどの予防や解決にもつながります」と述べられている。ここでのポイントは2つである。1つめが、「分かりやすく学びやすい環境づくり」。そして2つめが、「安心や楽しさが学校生活の支えとなる」ということ。これは、小学校に限らず、大学教育においても重要視すべき点である。

以上のことから、大学教育において、初年次から「学びやすい環境づくり」を進めることは、接続期の諸問題の解決に有効な手立てだと考えることができる。原田ら（2018）及び池谷ら（2018）が「高校までの学校段階と大学との様々なギャップに対し、多くの大学1回生が入学後に強い戸惑いや困難を感じることを「大1コンフュージョン」と命名し、その実態について調査したように、これまでに、初年次教育において円滑な高大接続を進めようとする試みは多くされてきている。また、宿泊型初年次教育の成果と課題についても多く検証されている（鍛冶，2018；辻野ら，2009）。しかし、これらの研究は、主に授業時間内の取り組みや、カリキュラムに位置づけられた「学修」の一部という取り扱いである。

組織社会化に関する研究では、活動体験の効果を経験の概念から捉えて検討している。Klein & Heuser（2008）によると、重要な出来事を表す時間の概念（Event Time）が個人の適応を促す。これは、出来事によって生じる非連続的な力動的变化である。Ashforce（2012）によれば、時間経過によって生じる連続変化（Clock Time）に比べると、Event Timeの方が個人の適応の変化に有用である。

高田（2018）は、これらの理論的背景に基づき、日常的活動がClock Time、非日常的活動がEvent Timeに該当するとともに、行事活動は授業等に比べて後者の特徴が強いことを説明している。特にEvent Timeでは、参加前に有していた考えが組織によって破壊されたり、その後新たな価値や視点が提供されたりするを経験する。Ashforce, Harrison & Sluss（2014）やLouis（1980）より、この繰り返しを通して、集団内におけるアイデンティティが形成され、適応しやすくなることも示唆される。したがって、これらの先行研究に基づくと、大学の行事は、教育課程内の活動と異なる形で学生生活へ大きな変化をもたらす点で特徴的な活動といえる。

また、内発的意欲の発現プロセス（櫻井，1997）によると、活動の結果として体験する楽しさや満足は、学習者の知的好奇心や達成、挑戦による影響を受ける。その前提として、学習者には他者受容感を覚えることで自身の有能感や自己決定感を高める過程が必要である。すなわち、サポーターからの承認や共感を通じた安心感を体験する機会が学生の動機づけや学生生活の充実に強い影響を及ぼすことが予想される。中でも、行事は「望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してより良い学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」（文部科学省，2008）活動である。それゆえ、安心して学ぶことのできる環境をつくるためには、他者受容感の充足や有能感・自己決定感の向上が不可欠となる。行事やサポーターづくりはその有効な取り組みであると推察される。

大学生の場合、入学後3か月以内に冗談を共有する体験を通して信頼感を高めやすい(葉山・櫻井, 2010)。また、池田・葉山・高坂・佐藤(2013)によれば、特に関係を共有しあうことが親密化の段階で満足感や深いつきあい方に一定の影響を及ぼすことも示唆されている。それゆえ、特に大学生においては、自主的な仲間関係形成に加え、入学直後からの行事を機にあまり交流のない仲間との関係も形成することで他者と受容しあえる環境の構築とサポーターづくりを拡大することが、学生生活の充実を推進する上で有効と考えられる。

しかし、高校までの学校種に比べると、大学の行事と学生生活全般との関連は十分に検討されていない。その原因として「新入生獲得のための行事」や「学園祭行事」など、高校までの行事との異質性が指摘されている。とりわけ、サークルなど異学年による参加や大学生の行事参加率の低さが原因となり、高等学校までの組織的な行事と同等できない(則定, 2019)。それゆえ、大学の行事に関する検討は学生自身の発達や単独の効果を検討する水準に止まり、組織的効果の意義を把握するためには複数の行事による学生生活の変化を解明することが課題となっている。他方、大学は学習成果やディプロマ・ポリシーに示す汎用的能力の育成を図る活動の1つに行事を挙げる傾向もある。したがって、学科単位で行う複数の行事を一連の活動として捉え、学生生活に対する適応過程へ焦点を当てることは、大学として学習成果獲得を保証するために有益な活動のあり方を解明する上で意義がある。

以上のことから、本研究では時間の概念に着目し、大学で安心して学びやすい環境づくりとして一連の行事活動を取り上げ、その成果を検討する。その上で、行事を通して育成すべき学生の要因を提案する。

## 1. 2 高知学園短期大学幼児保育学科における 学科交流行事の現状

幼児保育学科においては、平成29年度から、主に教育・保育実習等に関する不安の解消と学生同士の交流を促す目的で「異学年相互交流学習会」

を実施している。異学年相互交流学習会については、評価アンケートの結果から、学生の評価は概ね高く、全体として満足している学生が多いことを宮崎ら(2019)が示した。しかし一方で、自由記述には「年に1回だけの交流では不十分」「もっと交流の機会を増やしてほしい」という記述も見られた。つまり、学生は異学年学生との交流を肯定的に捉える一方で、交流が十分とはいえず、更なる交流や継続的な交流が必要とも感じていることが明らかになった。これらのことは、学科として学科交流行事実施に関する計画を見直し、改善が必要であることを示しているといえる。

そこで、学科教員で協議した結果、異学年相互交流学習会に加えて、学生が入学時から安心して学習に取り組むことができる環境構築を目指し、学生同士の交流を促し、仲間づくりを進めることを目的とした学科行事を企画し実施するに至った。そこで、本研究では、学科行事における学生の声を参考に、安心して学ぶことのできる環境づくりに必要な要因を検討することとした。

## 2 研究の目的及び対象者と方法

### 2. 1 研究の目的

本研究は、短期大学における学科交流行事の実践の効果を、アンケート調査の結果をもとに明らかにしたものである。その上で、学科行事をとおした学科運営のあるべき方向性を示すことを目的としている。

### 2. 2 研究の方法

学科行事参加学生を対象にアンケート調査を実施した。その上で、結果を分析し、考察を加えた。

アンケートの内容は、1・2年生共通のものを使用し、行事の具体的な内容を問う項目以外は共通の質問となるものを使用した。アンケート項目(図1)については、(1)及び(2)は参加前の学生の意欲及び参加後の満足に関する質問である。(3)、(4)は将来仲間やサポーターとなりうる知り合いができたかどうか、(5)は本行事の効果、(6)は継続してほしい行事かどうかについて問うたものである。なお、各項目には選択式回答に加え自由記

述欄を設け、最終質問にも全体を通しての自由記述欄を設けた。

- (1) 参加前の気持ちはどうでしたか。
- a とても楽しみ
  - b やや楽しみ
  - c あまり行きたくない
  - d まったく行きたくない
- (2) 参加後の感想はどうですか。
- a とても満足した
  - b やや満足した
  - c 少し不満だった
  - d とても不満だった
- (3) 【学科行事名】に参加して、新しく1年生の知り合いはできましたか。
- a たくさんできた
  - b 少しできた
  - c あまりできなかった
  - d まったくできなかった
- (4) 【学科行事名】に参加して、新しく2年生の知り合いはできましたか。
- a たくさんできた
  - b 少しできた
  - c あまりできなかった
  - d まったくできなかった
- (5) この行事を今後も続けていったほうが良いと思いますか。
- a とても思う
  - b 少し思う
  - c あまり思わない

- d まったく思わない
- (6) 来年度も【学科行事名】を開催する場合、残すと思う内容はどれですか。(行事ごとに主な内容を選択肢として示した)
- (7) その他、意見や感想があれば教えてください。

図1 評価アンケート項目

### 2. 3 研究の対象及び方法

対象は、高知学園短期大学幼児保育学科に所属する学生、令和元年度（平成31年4月～令和2年3月）1年生76名、2年生78名である。アンケート調査は、4月から8月に実施した。

なお、本研究は平成31年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会において、研究目的と計画およびインフォームド・コンセントの手続きなどに関する審査を受け、その承認を得て実施された（承認番号第6号）。

### 3 実践の内容

#### 3. 1 年間行事計画案の立案

学科行事の実施にあたり、実行委員を募り、学生主体の活動とすることは学科教員による協議によって決定していた。しかし、学生にとっては初めての取り組みであり、具体的なイメージを持ちにくいことが予想された。そのため、まずは担当教員が年間行事計画の案を作成し、それをもとに学生対象に学科行事について説明することにした。年度当初の年間行事計画の概要は表1に示すとおりである。

表1 年間行事計画の概要

時期	参加学生 【担当】	内容	主なねらい・留意点ほか
4月下旬	1・2年生 【2年生】	新入生歓迎会	・ 1年生と2年生の交流によって、新入生の学生生活への不安軽減を図る。
5月	2年生 【2年生】	2年生学年交流会	・ 実習前に交流を通して実習不安軽減を図る、実習に向かう意識を向上させる。

6月	1年生 【1年生】	1年生学年交流会	<ul style="list-style-type: none"> <li>入学後2ヶ月が経ち、人間関係や学習面での不安を持つ学生に対し、改めて学生間の交流を促すことで学生生活への不安軽減を図る。</li> <li>前期定期試験前に情報交換を行わせることで、<u>テストに対する不安の軽減</u>を図る。</li> </ul>
8月上旬	1・2年生 【2年生】	1・2年生合同交流会	<ul style="list-style-type: none"> <li>異学年相互交流学習会後に食堂を使用して実施。</li> <li><u>1年生の実習不安軽減</u>を図る。</li> <li>前期をいいイメージで終えさせることで、<u>自尊感情の向上</u>を促し、<u>スムーズな後期のスタート</u>につなげる。</li> </ul>
11月下旬	1・2年生 【2年生】	1・2年生合同交流会	<ul style="list-style-type: none"> <li>学園祭におけるクラスの団結や協力が、交流の活性化につながることを理解させ、<u>参加への意欲</u>につなげる。</li> </ul>
2月	1・2年生 【1年生】	1・2年生合同交流会 卒業生壮行会	<ul style="list-style-type: none"> <li>1年生が主体となって実施することで、2年生への感謝の意味を示すとともに、2年生の自尊心の向上にもつなげる。</li> </ul>
3月中旬	2年生 【2年生】	2年生学年行事 謝恩会	<ul style="list-style-type: none"> <li>卒業式後に実施</li> </ul>

なお、案を作成するにあたり、主に以下の点に留意した。

- ① 学生の置かれた状況（実習やテスト前の心理的に不安な状況など）を考慮し、それに応じた計画とすること。
- ② 学生主体で企画・運営が可能な活動とすること。
- ③ 学生のニーズに応じた活動にすること。

教員からトップダウン式に「参加させる」行事ではなく、学生自ら「参加する」「つくり上げる」行事となることを目指した。

### 3. 2 実行委員の募集

4月に、2年生対象に学科交流行事を企画していることと併せて、実行委員を募集している旨を連絡した。連絡は、2年生の必修授業終了後、昼休みの時間を使って担当教員が行った。どの行事を担当するかは学生自身が決めることができるようにし、また実行委員となった場合は行事の内容等を変更することも可能である旨も併せて伝えた。その上で、実行委員になることを希望する学生は、

担当教員まで申し出るように伝えたところ、26名の申し出があった。これは、休学中の学生を除く2年生78名のうち、実に3分の1の学生が自ら実行委員になることを希望したことになる。行事ごとの希望学生人数の内訳は表2のとおりであり、人数が少ない場合は実行委員決定後も実行委員を追加することも可能とした。

表2 行事ごとの実行委員の人数

行事名	実行委員の数
新入生歓迎会	5名
運動会	9名
レクリエーション	なし
交流ランチ	2名
遠足	8名
卒業生壮行会	未定
謝恩会	2名

### 3. 3 実行委員会の開催

行事の1～3か月前から実行委員会を開催し、学生主体の話し合いによる企画の立案に取り組んだ。担当教員がアドバイザーとして参加し、実行委員会において決定した企画案を担当教員が学科会議に諮り、承認を得た上で実際の計画を進めるようにした。準備期間に幅があるのは、行事の開催時期や会場予約が必要か否かなどの理由による。ただし、1年生対象に実施したレクリエーションについては、入学間もない1年生の精神的・物理的な負担を鑑み、実行委員は募らず、教員主体で計画した。

実行委員会の時間は1回15分～30分程度までと

し、学生の負担軽減を図った。実行委員会は主に個々、もしくは小グループが各々考えてきた意見を持ち寄り、全体で共有する場とした。もし実行委員会の場で課題が出た場合は、その場で長時間のディスカッションをすることは避け、空き時間などを活用して小グループで意見をまとめてくるように促した。その結果、全員の日程を合わせて開催する実行委員会は、どの行事においても3回以上行うことはなかった。

### 3. 4 行事の詳細

令和元年度8月末までに実施した学科行事の詳細は、以下のとおりである。(表3)

表3 令和元年度8月末までに実施した学科行事の詳細

行事名	日時	場所	対象	内容
新入生歓迎会	平成31年 4月	食堂	1年生, 2年生	グループで行うゲーム, フリートーク, お題トーク, お菓子を食べるなど
運動会	令和元年 5月	グラウンド	2年生	二人三脚, スウェーデンリレー, かりもの競走, ムカデ競走, しょうがい物リレー, 靴とばし, 王様ドッジ, 台風の目, 大なわとび, リレーなど
レクリエーション	令和元年 6月	大講義室	1年生	グループで協力して解くクイズ(脱出ゲーム)
交流ランチ	令和元年 8月	講義室	1年生, 2年生	サンドイッチやオードブルを食べる, 1年生と2年生がグループになってフリートークなど

## 4 結果

行事に参加した学生に対するアンケートの結果を表4に示す。なお、各項目について、左欄が人数、右欄が割合を示しており、割合については小数第2位を四捨五入した。

数、右欄が割合を示しており、割合については小数第2位を四捨五入した。

表4 学科行事に対するアンケート結果

【1】参加前の気持ちはどうでしたか。

	新入生歓迎会			運動会		レクリエーション		ランチ			全体	
	(1年生)	(2年生)	(合計)	(2年生)	(1年生)	(1年生)	(2年生)	(合計)	(合計)			
a とても楽しみ	3 4.8%	17 23.3%	20 14.8%	28 36.8%	6 9.0%	6 9.8%	9 12.0%	15 11.0%	69 16.7%			
b やや楽しみ	33 53.2%	51 69.9%	84 62.2%	40 52.6%	34 50.7%	34 55.7%	54 72.0%	88 64.7%	246 59.4%			
c あまり行きたくない	25 40.3%	5 6.8%	30 22.2%	7 9.2%	25 37.3%	20 32.8%	11 14.7%	31 22.8%	93 22.5%			
d まったく行きたくない	1 1.6%	0 0.0%	1 0.7%	1 1.3%	2 3.0%	1 1.6%	1 1.3%	2 1.5%	6 1.4%			
合計	62 100.0%	73 100.0%	135 100.0%	76 100.0%	67 100.0%	61 100.0%	75 100.0%	136 100.0%	414 100.0%			



【2】参加後の感想はどうか

	新入生歓迎会			運動会		レクリエーション		ランチ			全体	
	(1年生)	(2年生)	(合計)	(2年生)	(1年生)	(1年生)	(2年生)	(合計)	(合計)			
a とても満足した	42 67.7%	43 58.9%	85 63.0%	58 76.3%	29 43.3%	45 73.8%	30 40.0%	75 55.1%	247 59.7%			
b やや満足した	19 30.6%	28 38.4%	47 34.8%	17 22.4%	34 50.7%	13 21.3%	41 54.7%	54 39.7%	152 36.7%			
c 少し不満だった	1 1.6%	2 2.7%	3 2.2%	1 1.3%	4 6.0%	3 4.9%	3 4.0%	6 4.4%	14 3.4%			
d とても不満だった	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.3%	1 0.7%	1 0.2%			
合計	62 100.0%	73 100.0%	135 100.0%	76 100.0%	67 100.0%	61 100.0%	75 100.0%	136 100.0%	414 100.0%			

【3】行事に参加して、新しく1年生の知り合いは出来ましたか。

	新入生歓迎会			運動会		レクリエーション		ランチ			全体	
	(1年生)	(2年生)	(合計)	(2年生)	(1年生)	(1年生)	(2年生)	(合計)	(合計)			
a たくさんできた	0 0.0%	5 6.8%	5 3.7%		7 10.4%		11 14.7%	11 14.7%	23 8.3%			
b 少しできた	35 56.5%	52 71.2%	87 64.4%		48 71.6%		48 64.0%	48 64.0%	183 66.1%			
c あまりできなかった	21 33.9%	13 17.8%	34 25.2%		9 13.4%		12 16.0%	12 16.0%	55 19.9%			
d まったくできなかった	6 9.7%	3 4.1%	9 6.7%		3 4.5%		4 5.3%	4 5.3%	16 5.8%			
合計	62 100.0%	73 100.0%	135 100.0%		67 100.0%		75 100.0%	75 100.0%	277 100.0%			

【4】行事に参加して、新しく2年生の知り合いはできましたか。

	新入生歓迎会			運動会		レクリエーション		ランチ			全体	
	(1年生)	(2年生)	(合計)	(2年生)	(1年生)	(1年生)	(2年生)	(合計)	(合計)			
a たくさんできた	7 11.3%		7 11.3%	5 6.7%		18 29.5%		18 29.5%	30 15.2%			
b 少しできた	42 67.7%		42 67.7%	44 58.7%		32 52.5%		32 52.5%	118 59.6%			
c あまりできなかった	12 19.4%		12 19.4%	16 21.3%		9 14.8%		9 14.8%	37 18.7%			
d まったくできなかった	1 1.6%		1 1.6%	10 13.3%		2 3.3%		2 3.3%	13 6.6%			
合計	62 100.0%		62 100.0%	75 100.0%		61 100.0%		61 100.0%	198 100.0%			

【5】この行事を今後も続けていったほうが良いと思いますか。

	新入生歓迎会			運動会		レクリエーション		ランチ			全体	
	(1年生)	(2年生)	(合計)	(2年生)	(1年生)	(1年生)	(2年生)	(合計)	(合計)			
a とても思う	30 48.4%	56 81.2%	86 65.6%	54 71.1%	22 32.8%	26 42.6%	41 54.7%	67 49.3%	229 56.7%			
b 少し思う	26 41.9%	12 17.4%	38 29.0%	21 27.6%	24 35.8%	31 50.8%	31 41.3%	62 45.6%	145 35.9%			
c あまり思わない	6 9.7%	1 1.4%	7 5.3%	1 1.3%	16 23.9%	3 4.9%	2 2.7%	5 3.7%	29 7.2%			
d まったく思わない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 1.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.2%			
回答なし	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 6.0%	1 1.6%	1 1.3%	2 1.5%	6 1.5%			
合計	62 100.0%	69 100.0%	131 100.0%	76 100.0%	67 100.0%	61 100.0%	75 100.0%	136 100.0%	404 100.0%			

4. 1 参加前後の気持ちについて

参加前後の気持ちについて質問をした。表4【1】に示す結果のように、「参加前の気持ちはどうでしたか」という質問に対して、参加前から行事を楽しみにしているかどうかは、行事によって大きなばらつきが見られた。例えば、2年生対象の運動会については、「とても楽しみ」「やや楽しみ」という肯定的評価をした学生が89.4%であったのに対して、1年生対象のレクリエーションで

は59.7%であった。

以上の結果から、学科行事のように「楽しみ」を前面に押し出した活動であっても、「あまり行きたくない」「まったく行きたくない」という気持ちを持つ学生がいることがわかる。実行委員の学生による企画・運営という方法を取り入れ、学生のニーズに応じた行事を計画しているとはいえ、全員が楽しみにする行事を企画することは、当然困難である。しかし、行事によって大きなばらつ

きがあったことは注目すべき事実である。「あまり行きたくない」「まったく行きたくない」と答えた学生の自由記述には、「何をするのかわからなかった」「楽しくなさそうと思った」などの記述が見られた。このことから、実行委員以外の学生への事前の伝え方に問題があった可能性を考えた。そこで、行事ごとに学生に対してどのように連絡をしたかについて、整理した。

#### ① 新入生歓迎会

2年生が1年生を歓迎するという形式である。そのため、2年生には事前にグループ決め、歓談時の話題決めなどをするように連絡していた。1年生に対しては連絡用黒板での連絡及び授業終了時に教員から口頭での連絡のみであった。

#### ② 運動会

2年生のみが参加する行事である。事前に全員がくじを引いて4つのチームに分かれた。その後、チーム内で出場競技を決め、大縄跳びの役割分担やリレー・二人三脚等の出場順を決めるなどした。

#### ③ レクリエーション

1年生のみが参加する行事である。クイズ(脱出ゲーム)という内容のため、事前の情報提供は極力避け、集合時間及び場所の連絡のみとした。当日、会場においてくじ引きでチームを決め、ゲームの内容が教員から告げられた。

#### ④ 交流ランチ

1年生2年生ともに参加する行事であり、午前中に異学年相互交流学習会を行った後に実施した。内容は昼食をとりながら1年生のグループと2年生のグループが一緒になって歓談するというものであった。そのため、1年生・2年生ともに事前にグループを作っておくように教員から連絡し、併せてグループ内で歓談の際に参考となるように、自分の好物や好きな芸能人などを一つ考えておくように伝えた。

以上のように、行事によって1年生と2年生と

の間に、学生への連絡内容については大きな差があり、その結果、学生が事前に行事の内容を想像しにくいものもあったと考えられる。これは、事前に提供された情報の差が大きかった新入生歓迎会において、「とても楽しみ」「やや楽しみ」と答えた学生の差が大きく、与えられた情報の差が小さかった交流ランチにおいては、「とても楽しみ」「やや楽しみ」と答えた学生の差が小さかったことから、明らかである。

続けて、「参加後の気持ちはどうでしたか」という質問で行事に対する満足度を尋ねた結果、多くの学生が満足していることが明らかになった(表4【2】)。さらに、行事ごとにばらつきのあった参加前の気持ちとは異なり、参加後は行事にかかわらず多くの学生が満足していることがわかる。

特に、参加前には「とても楽しみ」「やや楽しみ」という肯定的評価をした学生が59.7%しかいなかったレクリエーションについて、参加後には94.0%の学生が「とても満足」「やや満足」と答えていることには注目したい。参加前に「あまり行きたくない」「まったく行きたくない」と感じていた学生の多くが、参加後には満足を感じたことを示している。

同様に、他の行事について参加前後の学生の心情について比較したとき、「とても楽しみ」「やや楽しみ」と答えた学生の割合よりも、「とても満足」「やや満足」と答えた学生の割合がすべての行事について高かった。つまり、学生は行事を通して心情を維持、または前向きに変化させたことがわかる。このことから、学科行事は学生の感情に対して前向きな働きかけをする可能性を持っているということがわかる。

#### 4. 2 仲間やサポーターづくりの効果について

「行事に参加して、新しい1年生の知り合いはできましたか」という質問に対する、1年生の回答の結果は、以下のとおりであった(表4【3】)。

新入生歓迎会において「たくさんできた」と答えた学生はおらず、「少しできた」も含めた肯定的評価は56.5%に留まった。レクリエーションについては、肯定的評価が82.0%となり、全体の平

均では肯定的評価が74.4%となった。

次に、1年生が異学年に人間関係を広げることができたかどうかを問う「行事に参加して、新しい2年生の知り合いはできましたか」という質問への回答結果が、以下のとおりである（表4【4】）。

「たくさんできた」「少しできた」と答えた学生は、新入生歓迎会で79.0%、交流ランチで82.0%、全体の平均で74.8%であった。このことから、1年生は学年にかかわらず、多くの学生が人間関係を広げることができ、仲間やサポーターの存在意義を考えるきっかけになったことがわかる。

では、2年生の仲間づくりについてはどうか。2年生同士の仲間づくりを促す目的で行った行事は運動会のみである。運動会以外の行事では2年生同士の仲間づくりを促す活動を特別に設けなかったため、アンケート項目から質問を省いた。

「行事に参加して、新しい2年生の知り合いはできましたか」という質問に対して、2年生のうち65.4%の学生が「たくさんできた」「少しできた」と答えた。

2年生については、すでに同じメンバーで1年間を過ごしているため、新しい人間関係の広がりにはあまり期待できないと考えていた。それよりもむしろ、今ある人間関係を深める、より強固なものにするきっかけとすることをねらった行事という位置づけである。少なくとも学科の教員はそう考えていた。しかし、実行委員の話し合いの中では、「クラスがちがうと話したことの無い人がある」「同じクラスでも学籍番号が離れていると話ず機会が少ない」「SNS上でしか話さない」などの意見が見られた。そのため、メンバーの決定はくじ引きにして、2年生内においても新たな人間関係の広がりを促した。その結果、65.4%の学生が「新しい2年生の知り合いができた」と答えた。2年生対象であっても、仲間やサポーターをつくる目的で学科行事を実施する意味は大きいことが明らかになった。

#### 4. 3 今後の行事の継続について

「この行事を今後も続けていったほうが良いと

思いますか。」という質問に対して「とても思う」「少し思う」と答えた学生は、全体の平均では92.6%と高い割合を示している（表4【5】）。しかし、行事ごとに見ると一番評価の高い運動会で98.7%であったのに対して、一番評価の低いレクリエーションでは68.6%であり、30ポイント以上の差が見られる結果となった。

なお、運動会は2年生のみが参加する行事、レクリエーションは1年生のみが参加する行事であった。そこで、行事内容にかかわらず、学年によって評価に偏りがある可能性を考え、両方の学年の学生が参加した行事である、新入生歓迎会と交流ランチにおける学年ごとの評価結果について比較した。その結果、新入生歓迎会及び交流ランチのどちらの行事についても、2年生が1年生よりも肯定的評価をした学生の割合が高いという結果になった。例えば新入生歓迎会において、「とても思う」「少し思う」と答えた2年生の学生は98.6%であったのに対し、1年生の学生は90.3%。交流ランチでは、2年生が96.0%で、1年生が93.4%であった。しかし、ともに9割以上の学生が高く評価していることから、学年間による差は問題にはならないと考えることができる。

では、レクリエーションの継続実施を望まない1年生の学生が25.4%もいる原因は何か。その原因のひとつに実施方法があると考えられる。1年生へのアンケートの自由記述欄には、「時間がない」「休みたい」「めんどくさい」などの記述が見られた。また、「補講を入れるならなくてもよい」という記述も見られた。これらの記述から、わざわざ時間割を変更してまで学科行事をする意義を感じられない学生の姿が想像できる。さらに「他の学科や学年との交流の方が必要性はありそう」といった記述もあったことから、異学年（2年生）との交流行事ならまだしも、同学年（1年生）との交流行事をすることに意味を見出すことができないのではないかと考えられる。

こういった結果を生んだ原因として考えられることのひとつに、実行委員を募り、企画・運営をしなかったことが考えられる。1年生のレクリエー

ション行事についてのみ、実行委員を設けず、教員主導で企画・実施した。学生主体の活動にはなっていなかったのである。そこには、入学後2ヶ月を経て前期試験前の時期に不安を抱える1年生の学生に、さらに負担を強いることを避けようという思いがあったことは間違いない。いわば、学生のためを思って進めたことではあったが、その方法が25.4%の否定的評価を生んだのではないか。

前述のとおり、実施前から主体的に行事にかかわった学生数は行事によって異なる。主体的に行事にかかわった学生が多かった順に行事を並べると、運動会、新入生歓迎会、交流ランチ、レクリエーションとなり（表2）、その順に学生の満足度に対する結果を並べたものが図2である。主体的なかかわりを持った学生の割合が多い行事ほど、「とても満足」と答えた学生の割合が多いことがわかる。

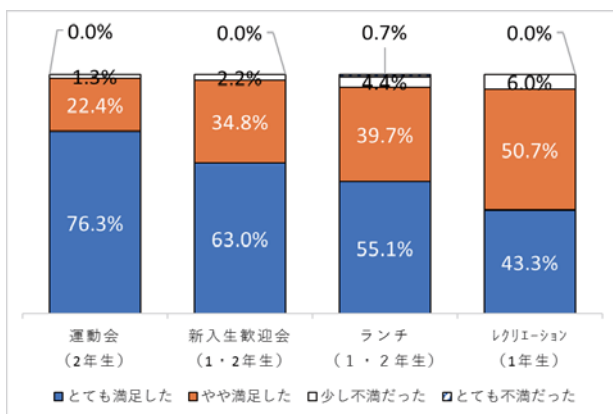


図2 行事別学生の満足度  
(主体的なかかわりの多かった順)

さらに、行事の実施の継続を希望するかどうかについて尋ねた結果を図3に示す。この結果も同様に、主体的なかかわりを持った学生の割合が多い行事ほど、行事を続けた方がいいと「とても思う」と答えた学生の割合が多いことがわかる。

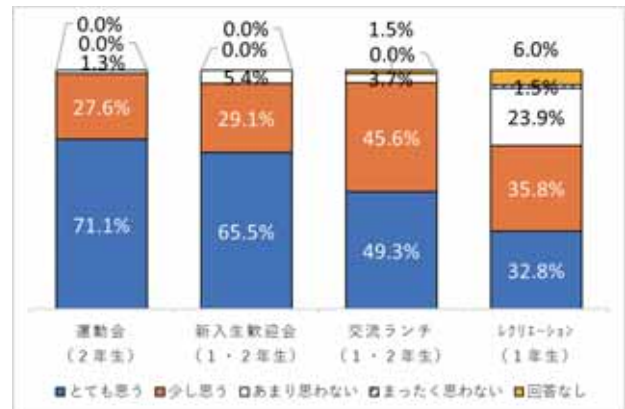


図3 行事別この行事を続けた方がよいか  
(主体的なかかわりの多かった順)

つまり、学生は自分たちが参加する学科行事について、主体的なかかわりをする事で、より満足し、今後も続けていきたいと感じることが明らかになった。

## 5 考察

このように、学科行事を実施するだけでなく、実施後にアンケートを行い、行事に対する満足度等についても調査することにより、学生の状態に応じた学科行事の企画・運営のあり方がかなり明確になった。以下に、本調査結果で得られた主要な点をまとめて示す。

- ① 実行委員のみならず、参加学生に対して行事以前から十分に情報提供することで、行事の実施を楽しみにする学生の割合は大きくなる。つまり、学生にとってわかりやすく、行事のイメージを持ちやすくすることで、不安なく期待を持って行事に参加しやすくなる。
- ② 学科行事は学生の感情に対して前向きな働きかけをする可能性を持っているということがわかった。つまり、大学への適応や大学での人間関係に不安を抱えているような学生がいる場合、学科行事の実施によって、その不安を軽減させる可能性がある。
- ③ 学年にかかわらず、多くの学生が学科行事を通して同学年・異学年に新しい知り合いができた。つまり、大学生活を支える基盤となる

仲間づくり・サポーターづくりを促すのに、学科行事は適している。

- ④ 行事に対して学生が主体的に関わった行事ほど学生の満足度は高く、継続した実施を望む学生も多かった。つまり、学科行事を企画・運営する場合、学生の主体的なかかわりを促すことで、その効果はより高くなる。

以上のように、学科行事の効果として予測されてきた効果が、アンケート調査の結果によって浮き彫りになったことは有意義なことである。とくに、「学科行事を企画・運営する場合、学生の主体的なかかわりを促すことで、その効果はより高くなる」ことが大学生においても当てはまることが明らかになった意味は大きい。大学生活においては、高校以前と異なり、学生同士のつながりが希薄になりがちであったり、特定の学生との関係の中で大学生活を送りがちになったりする。しかし、そのような状況においても、大学生活を支える基盤となる仲間、サポーターづくりは重要である。そのため、大学は初年次教育等で学生同士のコミュニケーションを促すなどの取り組みをすることになるが、現状では、その多くは教職員主導である。むしろ、小学校・中学校現場の方が、児童・生徒主体で行事を企画・運営する取り組みは充実しているのではないだろうか。折りしも、学生主体のアクティブ・ラーニングの導入が大学教育に強く求められている。文部科学省（2016）も、大学教育では「個々の学生の主体性を更に引き出す多様な学びの場を創り、十分な能動的学修とそれを支える広く深い知識・技能を獲得できるようにする必要がある」と述べ、アクティブ・ラーニングの充実を促していることは周知のとおりである。しかし、「主体的・対話的で深い学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）」は何も授業でのみ実践されるべきものではない。大学生であっても、学生は、主体的に自ら考え、実行委員などとして対話的に行事を進めたいと望んでいる。そのため、教員は学生の持つ可能性を信じ、学生とともに学科や大学全体をつくり上げるという意識を持つことが大切である。本研究によって、まさに、

学生と教職員の協働による学科運営を考えることが重要であるという結果が得られた。高知学園短期大学（2019）によると、幼児保育学科では平成29年度に退学者数が増加した。休学者数も例年より多かった。その中で、従来はほとんど見られなかった入学直後から登校することなく、そのまま退学につながる入学者が特徴的であった。この傾向は平成30年度も見られた。この状況へ対応するため、平成31年度には従来から取り組んでいる異学年相互交流学習会に加え、仲間関係形成や自己充実の体験を推進することで、入学者の大学生活に対する不安を入学直後に軽減することを目指した。それが本研究で取り上げた学科行事の充実である。その結果、当該年度前期終了時における休退学者はいない。

ただし、この状況が学科行事の直接的な効果によるものか否かは不明である。別の要因による効果や偶然性も予想される。それでも、行事を実施して見れば、満足感が高くなる様子が見られた点は休退学予防に寄与する取組であることが示唆される。とりわけ、内発的意欲の発現プロセスに基づけば、行事の準備から実施に至る過程で他者受容感を覚え、好奇心の活性化や挑戦する意欲が高まり、その結果として満足感が高まることも考えられる。また、休退学者数は当該機関の学習成果獲得の保証を裏づける指標であることから、受容を軸にした取り組みが安心できる環境づくりへ一助をもたらすことが示唆された点は意義があったと考えられる。

今後は、本研究で明らかになった結果を活用し、学科行事をさらに発展・充実させていく必要がある。文部科学省（2011）は異年齢の交流活動が効果をあげるポイントについて、①「関わる喜び」が獲得できる活動を設定しているか、②年長者が主体的に取り組める活動になっているか、③全教職員が「交流活動」で子供が育つメカニズムを正しく理解し、適切な対応ができる仕組みになっているか、の3つをあげている。今一度、現在の取り組みをこのポイントと照らし合わせ、学科行事に対する取り組みの一層の充実に向かって、学生

と教職員の協働のもとに進めていくことが期待される。

このように、本研究では「安心して学ぶことのできる環境づくり」を図るための学校行事に求められる要因として、学生にわかりやすくイメージを持ちやすくする工夫、人間関係に対する不安の軽減、仲間づくり・サポーターづくりの促進、主体的なかかわりの促しの4点が示唆された。ただし、本研究は条件を統制した実験法を採用していない。それゆえ、因果関係の特定には限界がある。例えば、自尊感情を研究要因に取り入れてその変化を縦断的に検討しながら、学生の学習活動の動向を分析することも今後の課題である。それでも、文部科学省（2011）があげた3点とは、主体性や不安の軽減、楽しみの追求などに関して共通する点も見られる。それゆえ、今後は、これらの4点を本学科における学科行事の主たる目的として定め、各行事における4点の効果を検証して学生の育ちを確認し、そのフィードバックを通して自尊感情を高めることが求められる。その上で、その実践による質的分析と条件を統制した上で自尊感情に対するサポーターづくりの効果を測定する量的分析を総合的に吟味することによって、学習成果獲得の保証へ貢献できる学生支援システムを開発することが求められる。

## 引用文献

Ashforce, B. E., The role of time in socialization dynamics. In C. R. Wanberg. (Ed.), *The Oxford handbook of organizational socialization*. 2012, New York: Oxford University Press. 161-186.

Ashforce, B. E., Harrison, S. H., & Sluss, D. M., Becoming the interaction of socialization and identity in organizations over time, In Shipp, A. J., & Fried, Y. (Ed.), *Time and work how time impacts individuals*, 2014, London and New York: Psychology Press, 11-39.

Bandura, A., Self-efficacy: Toward a unifying

theory of behavioral change. 1977, *Psychological Review* (84), 191-215.

原田新・池谷航介・松井めぐみ・望月直人, 「大1コンフュージョン」の実際(第1報) —高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査—, 2018, *岡山大学教師教育開発センター紀要* (8), 97-107.

葉山大地・櫻井茂男, 友人関係初期における冗談関係の認知の役割, 2010, *筑波大学心理学研究* (40), 35-41.

池田幸恭・葉山大地・高坂康雄・佐藤有耕, 大学内の友人関係における親密さと共有様式との関係, 2013, *青年心理学研究* (24), 111-124.

池谷航介・原田新, 「大1コンフュージョン」の実際(第2報) —大学生活を支える段階的な援助サービス—, 2018, *岡山大学教師教育開発センター紀要* (8), 173-180.

石川勝彦・児島功和, 初年次ゼミの学習を促進するクラス環境〜クラス環境と学生の特性との相互作用に注目して〜, 2018, *山梨学院大学法学論集* (81), 141-158.

伊藤茂樹, 大学生は「生徒」なのか: 大衆教育社会における高等教育の対象, 1999, *駒澤大学教育学研究論集* (15), 85-111.

鍛冶博之, 徳島文理大学総合政策学部における「体験型」初年次教育の成果と課題—2017年度「遍路ウォーク」と「新入生宿泊研修」を例に一—, 2018, *徳島文理大学研究紀要* (95), 81-93.

Klein, J. J., & Heuser, A. E., The learning of socialization content: A framework for researching orientating practices., 2008, *Research in Personnel and Human Resources Management* (27), 279-336.

高知学園短期大学, *令和元年度自己点検・評価報告書*, 2019, 高知学園短期大学, 様式14 (<http://www.kochi-gc.ac.jp/img/university/R1jikotenken.pdf>, 2019年10月1日閲覧)

厚生労働省, 保育所保育指針, 2014

Louis, M. R., Surprise and sense making: What newcomers experience in centering

- unfamiliar organizational setting, 1980, *Administrative Science Quarterly* (25), 226-251.
- 宮崎大樹・浜田幸作・池澤眞由美・末田光一・竹村正・吉村斉・寺尾康・田村由香・山本英作・Paula D.Fabian, 短期大学における教育・保育実習に関する異学年交流学习の教育効果, 2019, *高知学園短期大学紀要* (49), 13-24.
- 溝上慎一, 高大接続の本質「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題, 2018, 学事出版
- 村上幸人・藤田耕一・寺井由美・光森智哉・大谷修司, 宿泊合宿による「1000時間体験学修」についての新入生セミナーの実際とその効果：ピア・サポート制度の活用, 2014, *教育臨床総合研究* (13), 17-31.
- 文部科学省, 中学校学習指導要領解説：特別活動編, 2008, ぎょうせい
- 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 子どもの社会性が育つ「異年齢交流活動」：活動実施の考え方から教師用活動案まで, 2011
- 文部科学省, 学生の中途退学や休学等の状況について, 2014
- 文部科学省, 幼稚園教育要領, 2014
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター, スタートカリキュラムスタートブック, 2015
- 文部科学省, 小学校学習指導要領（平成29年告示）, 2017
- 文部科学省, 高大接続システム会議「最終報告」2016, 36-40.
- 内閣府, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領, 2014
- 中間玲子, 自尊感情と心理的健康との関連再考：「恩恵享受的自己感」の概念提起, 2013, *教育心理学研究* (61), 374-386.
- 則定百合子, 大学サークル集団における心理的成果, 2019, *青年心理学研究* (30), 153-157.
- Rosenberg, M., *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press., 1965, 3-15.
- 櫻井茂男, 学習意欲の心理学：自ら学ぶ子どもを育てる, 1997, 東京：誠信書房, p.10.
- 高田治樹, 大学生サークル集団における行事活動の心理的成果と探索的検討, 2018, *青年心理学研究* (29), 71-90.
- 辻野順子・森川英子・西美江・津田尚子, 高井聰美・中楠登志子・中山真理・岡本恵, 学外宿泊オリエンテーションの教育効果の検証, 2009, *関西女子短期大学紀要* (19), 27-38.
- 和足憲明・名取洋典, 初年次教育の中退防止効果：いわき明星大学における取り組み, 2019, *いわき明星大学研究紀要人文学・社会科学・情報学篇* (4), 11-27.

受付日：令和元年10月11日  
受理日：令和2年1月17日

---

**Report**

---

**A method for departmental events that aim to create a worry-free learning environment for students  
—Practice and assessment of theme-based events in junior college—**

Daiki MIYAZAKI<sup>1\*</sup>, Kosaku HAMADA<sup>1</sup>, Mayumi IKEZAWA<sup>1</sup>, Tadashi TAKEMURA<sup>1</sup>  
Hitoshi YOSHIMURA<sup>1</sup>, Yasushi TERAOKA<sup>1</sup>, Yuka TAMURA<sup>1</sup>, Eisaku YAMAMOTO<sup>1</sup>,  
Paula D. FABIAN<sup>1</sup>, Nobuhiro OHMATSU<sup>1</sup> and Naomi OKAMURA<sup>1</sup>

**Abstract:** This study clarifies the effect of the practice of theme-based exchange events at a junior college based on the results of a questionnaire distributed to the students. Students in the Department of Teacher Training were targeted for research. There were 76 first-year students and 78 second-year students at the junior college who participated in the theme-based exchange events and responded to the questionnaire. With the aim of creating a worry-free learning environment for students from the time of enrollment, several departmental events were held with the purpose of encouraging student interaction and promoting friendship. The departmental theme-based events that were planned throughout the year included a welcome party for new students, an athletic meet, recreational activities, communication lunch exchanges, excursions, a send-off party for graduates, and a thank-you party. Analysis of the results of the questionnaires from four of the theme-based events are shown: the welcome party, the athletic meet, a recreational activity, and a communication lunch exchange. Based on the results of the questionnaires distributed to the students, the results show the direction of department management through holding departmental events.

**Key Words:** event, learning environment, teacher training of nursery school and kindergarten, junior college

---

<sup>1</sup> Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, \*Email: dmiyazaki@kochi-gc.ac.jp



